

末黒野

昭和二十八年十月八日第三種郵便物認可(毎月一回発行)  
平成二十一年十月五日発行 第六十四巻第十七号

(通巻七五八号)

# 末黒野

すぐろの

10月号

(通巻758号)



# 五月富士

小川玉泉

夜をこめて稿書く梅雨の雷近し

雨止まず池の水際を鷓歩み

夕風の運ぶ汐の香花ユツカ

斎場を覆ふ青蔦柩出づ

飛魚の弧に収まりし沖の船  
池の岸縁取る溶<sup>ら</sup>岩<sup>ば</sup>や鴨涼し  
指先に鳴く天牛の底力  
青竹の斜の切口清水汲む  
淙々と千曲の流れ洗鯉  
歓声の峠雲脱ぐ五月富士  
白南風や富士にひと筋残る雪  
朝焼けの波を畳めり烏帽子岩

## 選後に

### 小川玉泉

昔から暑さ寒さも彼岸までといわれているが、残暑もこの号の発行される頃には収まっているであろう。

末黒野の各句会に出席の方は百も承知のことであるが、同一の俳句作品を本誌と他誌へ同時に投句する、いわゆる二重投句が会員にあつたので、厳に慎んで頂きたい。作者にとつての自信作を認めて貰いたいとの気持ちは、誰もが抱く。だからといって、複数の選者へ選を委ね、あわよくば入選をして作品が活字化され日の目を見ることを願う考え方は身勝手であり、選者に対して非礼極まりない。これと同じく、他誌の評価の高い作品を真似て、季語のみを換え投句するという、いわゆる盗作も慎まなければならない。それでなくとも、僅か十七音の俳句であるから、期せずして同じ表現の作品が生まれることが起こり得る。その時は先に発表された作品に著作権を譲るのが常道である。俳句は点取りのために作るのではない。作者自身の感得した感動を自分の言葉で表現するものである。

今月の投句のなかで目についたのが、誇張した表現であ

る。①「一村を包み隠すや青芒」②「短夜や太平洋を船の旅」③「総の地に満ちてこぼるる海紅豆」の三句。①の一村を包み隠すは芒の茂りを表現しているのであるが、村全体が芒で包まれることはあり得ないことである。②の太平洋の捉え方であるが、地球表面積の三分の一を占める太平洋。作者は船に乗って、どこに居るのか、作者の居場所が不明である。広い海原のどの位置で船旅を満喫しているのか、読者には判らないのである。③の総の地は上総、下総をまとめた略称であり現在の千葉県中央部から北部、茨城県の南西部を指す。作者が目にした真つ紅に木全体を染めているのは、限られた場所であろう。総の地では、漠然として、読者に情景が迫ってこない。写真でいう焦点のぼやけた、捉えどころのない、ただ写っているだけの作品になっているのである。次に意味不明の作品を挙げる。④「合併に名を変へし村梅雨最中」⑤「原籍はやはり横浜通し鴨」⑥「紅薔薇の崩れし闇に目覚めおて」の三句。④は合併に名を変えた村を特定しないと読者には通じない。⑤の原籍はやはり横浜は誰の原籍を指すのか作者の独りよがりになっている。⑥の紅薔薇の崩れし闇は寢室の闇と受け取れるが、闇の中の薔薇が見えるのか疑問である。読者の立場で推敲することを心掛けて欲しい。選評に移る。

楽の音を抱くごと汗の指揮者かな

新堀満寿美

この句は読者にとつて、いかようにも想像出来る広がりがある。額から汗を流し、タクトを振る指揮者。その指揮ぶりが、如何にも楽曲の醸す雰囲気を大切に、抱くようである。作者も演奏に陶醉しているのである。汗が利いた。

どの路地も四万六千日の風

稲垣 佳子

四万六千日は浅草寺の境内で開かれる七月九・十日の鬼灯市の傍題である。十日に参詣すると四万六千日分に相当する功德を授かるといわれる。参拝客であふれる情景を句またがりて四万六千日の風と詠みとつたのはお手柄。

打水に飛石青く暮れにけり

小林 一榮

暑かつた一日を締めくくる庭への打水を済ませた。涼しい風の訪れる庭を眺めていて、気付いたことに、水をたつぷり貰つた飛石が、本来の石の青色を見せている。こんなに美しい飛石だったのかと、涼しさを楽しむ作者。

三尺の水芭蕉の葉糸蜻蛉

森清 堯

水芭蕉といえば尾瀬ヶ原の一尺（三十穂）近い白い花を目に浮かべる。花の終わつて後、葉は育つて長さ三尺近く、幅一尺近い。それを眼にした作者は思わずこれが水芭蕉と驚いたのである。あたりには糸蜻蛉が飛び夏本番。

杉の秀の風の涼しき天城越え

田村 加代

『伊豆の踊り子』の場面は遠い昔になつたが、名爆の多い観光地の天城。車を使つての旅は好きな所の景色を堪能出来る。作者も原生林めく杉に圧倒されながら、空高い梢から届く涼風に身を委ねたのである。梢の揺れが見える。

青血球紫血球やも七変化

小田嶋野笛

久し振りの作者独特の発想の句に接した。人間の血液の赤血球と白血球が紫陽花の場合は青血球と紫血球があり色の変化の原点ではと考えるに至つたのがこの句。紫陽花が何故色を変えるのかを追及する所から詩が生まれる。

宵宮や石鹼の香とすれ違ふ

紀平 吉勝

家族と共に近くの産土の宵祭りに出掛けた作者。昼間の汗を流し、すつきりとした身形で出掛けた。たまたま道で擦れ違つた人から、香水ではない何ともいえないよい香りが出た。この人も一風呂浴びて石鹼を使ったのだと納得。

紙魚走る子の絵日記を子に返す

伊藤 敦子

九十二歳の作者のお子さんの絵日記は六十年以上保管されてきた物であろう。身辺整理の際に手にした紙魚の走る日記。それを記念にお子さんへ渡されたとは。作者の賢母ぶりが窺える。母親の愛情を即物的に詠まれた佳句。

(以下略)

# 青炎集

# 小川玉泉選

横浜 新堀 満寿美

横浜 小林 一榮



慈悲相の露座仏に受く涼気かな

自転車を立ち漕ぐ子等や青嵐

梅雨晴の峰へのリフト捉へけり

亡き夫への父の日の供華気張りけり

楽の音を抱くごと汗の指揮者かな

色競ひ丈の揃ひし花菖蒲

新宿 稲垣 佳子

横浜 森 清 堯

どの路地も四万六千日の風

曇る日は曇る色なる合歡の花

行商の身の上話梅雨晴間

江ノ電の踏切脇や額の花

初蟬や仮寝の耳を疑へり

鯉の背の傷新しき夏の空

霧降の滝のしづきに花あやめ

余生なほ曾孫誕生や五月富士

湘南や潮の香の海開き

打水に飛石青く暮れにけり

蜘蛛の囿に何もかからず今朝は雨

健やかな余生願へり夏帽子

小流れの音を封ずる芹の花

花穂揺るる片白草や雨意の風

水貝や美術館めく浜の宿

さはさとはと風紋見する青田かな

三尺の水芭蕉の葉糸蜻蛉

万緑をぼかす靄湧きロープウェイ

横 浜 田 村 加 代

香水の残り香居間に妻の留守

横 浜 伊 藤 敦 子

河骨を揺らして現るる鯉の口  
杉の秀の風の涼しき天城越え

碑の文字をかくせり苔の花

伊豆に来て踊り子草の咲く夕べ

庭箒握りて黴の香のほのか

草刈つて没り日華やぐ湖畔かな

傘返す庭のあぢさゐ二本添へ

鬼灯を売つていなせな男衆

水羊羹作りて母の味ならず

歩かねば詩心おとろふ青田風

もう一度別れの会釈梅雨の駅

横 浜 小 田 嶋 野 笛

紙魚走る子の絵日記を子に返す

えご咲くや散るや愛憎過去のもの

横 浜 松 尾 京 子

青血球紫血球やも七変化

昨日の色深めて今日の濃紫陽花

生きとし生く虫の闇の揺らぎかな

観音の慈眼遙けし青葉風

セル軽し母の気丈さ譲られず

立枯れの松に荒梅雨容赦なき

熱の子に雫数ふる梅雨の窓

裏山の鳥声はづむ梅雨晴間

彼が形見誰が形見とや夏衣

踏切の開くに間のあり合歡の花

横 浜 紀 平 吉 勝

夏つばめ群舞の宵の陸橋下

西瓜切る二度入れし刃の食ひ違ひ

横 須 賀 大 川 暉 美

サマージャンボ窓口狭きくじ売場

夏霧の霽れて天城の連なれり

宵宮や石鹼の香とすれ違ふ

黙々と鍬ふる夫や汗滂沱

梅雨寒や空つばで発つロープウェイ

買物のレシート伸びぬ梅雨晴間

病棟の開かずの窓や遠花火

兄在りし日のまま置かる藤寝椅子

# 耕す (選後評)

## 松本三千夫

川治ひの家にカンナが咲いてゐる

これは、短くても立派な文です。しかし、「かわぞひの／＼へにかんなが／さいてゐる」と五七五になっていますし、「カンナ」という秋の季語もあります。俳句と見れば俳句らしい形をしています。これを俳句と見る人はまづいらないでしょう。何故なら、これは一行の報告文でしかないからです。報告文は散文ですが、俳句は韻文です。

川治ひの家にカンナが咲きにけり

こうなると、「けり」という切字も入り、俳句らしい雰囲気になってきました。しかし、これでは韻文としての格調がありません。それは、「が」という助詞が邪魔をしているからです。「カンナが咲く」は散文の世界です。それと、「家」もやや漠然としていますから、焦点を当てると大きな家か小さな家か、商家か農家か、あるいは空家かかはつきりしてきます。

川治ひの空家のカンナ耕を競ふ

こうすると、「が」はなくなり、「に」も取れます。散文

くさい助詞「に」「が」が一扫され、韻文としての趣が出てきました。散文では重要な役割を持つ助詞テニヲハも、韻文(俳句)ではマイナスに働く場合が多いのです。さらに、「空家のカンナ」には人の世の無常と、荒れた庭の小さいながらも自然の生命力とが対比され、カンナが際立つてきます。また「カンナ」とあれば、「咲く」も不要です。そして、ここでは「の」が二つ使われていますが、この「の」の重なりは重要な働きをしています。それは、「川治ひ」(大) ↓ 「空家」(中) ↓ 「カンナ」(小)、即ち、大 ↓ 中 ↓ 小という視線の動きが、「カンナ」に来てびたりと止まります。この焦点を定めて行く視線の動きは、俳句表現の一つのポイントになります。例を挙げてみましょう。

A みちのくの伊達の郡の春田かな 富安 風生

B 利根川の古き港の蓮かな 水原秋櫻子

C 梅雨明けや森をこぼるる尾長鳥 石田 波郷

A句、「みちのく」東北六県(大) ↓ 「伊達の郡」福島県(中) ↓ 「春田」眼前(小)。

B句、「利根川」(大) ↓ 古き港(中) ↓ 蓮(小)。

C句、「梅雨明け」(全体) ↓ 「森」(中) ↓ 「尾長鳥」

(部分) という具合です。では小誌八月号より二句。

須走<sup>天</sup>の宿<sup>中</sup>の夕餉<sup>小</sup>や木の芽和 高橋 光民

明け六つ<sup>全体</sup>の風<sup>中</sup>の小江戸<sup>部分</sup>や鯉<sup>中</sup> 太田 良一



卓上の塩入れ替へて梅雨の明け 鈴木 一恵

塩分の過剰摂取は良くないが、塩は我々の食卓に欠かせない。梅雨も明け、湿っぽくなった食塩を容器から出してサラサラのものと入れ替えるのである。梅雨明けの喜びを日常の細やかな動作を通して表現しているところが良い。

夕焼やペダル踏む子ら一列に 榎本佐智子

家路を急ぐ子供達であろうか。場所の特定はできないが、川堤を走る子供達の姿が浮かんでくる。夕焼けを映した川には目もくれず、一列に自転車走らせろ子供達。「夕焼や」が詩情豊かなドラマの一場面を連想させて楽しい。

梅雨の闇北方四島還らざる 吉田美智子

日本人の悲願である北方四島（南千島の国後・択捉・歯舞・色丹の四島）の返還問題。同島への日本人のビザなし渡航は制度化されたが、返還の見込みは全くない。そうしたもどかしさや不満を「梅雨の闇」が見事に物語っている。

声かけて夫と二人の大夕焼 木村 弓子

視野一杯に入れた夕焼空の見事な彩りに、思わず夫を呼び、肩を並べて眺め入っているのだが、「夫と二人の」と、他をすべて切り捨ててしまったところが何とも若々しい。

古民家や梅雨たけなわを眠りをり 今野 明子

梅雨の最中古民家を訪ねた。折からの梅雨に古民家が煙ったように浮かび上がっているのを「眠りをり」と表現。

しつとりと小山のような古民家が「眠る」によく出ている。

あぢさゐの藍をはなる雫かな 梅田 武

藍色の紫陽花に宿った雨滴が雫となつてぼとりと落ちた。その自重に耐え兼ねて落ちる透き通った雫を、「はなる」とスローモーションのように描き出しているではないか。

月よりの雫の光る濃紫陽花 鈴木 英男

この句も紫陽花に宿った雫の美しさを詠んでいる。その美しい雫は月からの雫だというのだ。惜しげもなく降り注ぐ月の光に輝く雫は、まさに月からのものに相応しい。

中空へ影のこしゆく黒揚羽 中村 美代

中天に黒揚羽が「影のこしゆく」というのは、強い日差しの下で捉えた物体は目を移すとそこに残像として残る。「影」をそう捉えれば、黒揚羽もまた強く印象づけられる。

天空の己が道行く黒揚羽 庄司 正江

天空の黒揚羽を目で追うと、まるで自分の道がそこにあるように悠々と飛んで行く。中七が夏蝶を巧みに表現。

サンガラスはづして祖母にもどりけり 細島 孝子

強い紫外線を避けるサンガラスはお洒落にも重宝する。それを外して「祖母にもどる」、その転換が見事で面白い。（以下略）

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



梅雨の月躰きし足さすりけり  
梅雨晴間日差しに磨く銀の匙  
横 浜 鈴木 一恵

卓上の塩入れ替へて梅雨の明け  
肩の力抜きたる暮し豆の飯  
白シャツのボタンを探すお針箱

雑貨屋の音ひとつなし日の盛り  
杉の香の割箸を添へところ天  
榎本佐智子

七彩に触れあふ四葩島に満ち  
放水の穂先ひかるや凌霄花  
夕焼やペダル踏む子ら一列に

梅雨の闇北方四島還らざる  
杖の人童袋に語りかけ  
吉田美智子

家いへの山を背にして田草取  
俎の糠漬匂ふ梅雨のあけ  
走り茶の香りに足るを知りにけり

池の面の水の昏さや五月雨  
差し伸ぶる手の染むほどや濃紫陽花  
木村 弓子

凌霄の炎のごとく揺らめけり  
駄駄こぬる幼涙と玉の汗  
声かけて夫と二人の大火焼

から咳の夫は隣室梅雨湿り  
賑やかに取れたて届く夏野菜

古民家や梅雨たけなはを眠りをり  
古城吹く風にためらひ蓮の花

夏蝶の静もる里に踊り出づ

親を追ふ子亀の水尾のかすかなる  
良き汗や残り二丁の善光寺

切支丹墓地に散り敷く梯梧かな  
青田波口笛のせて行きにけり

あぢさゐの藍をはなるる雫かな

地を染めし楊梅の実や雨滂沱  
月よりの雫の光る濃紫陽花

日は落ちぬ花橘の匂ふ道

浜木綿の花咲き揃ふ退院日

今野 明子

梅田 武

鈴木 英男